

1999]。能登・越中地方は5～6期にA1類、D1類、7期にC1類、D1類が見られる[栃本2000；大野2003；岡本2003]。加賀地方は4～6期にB1類、7期にD1類が見られる[谷内尾1983；田嶋1986；安2003]。北近畿地方は京都府浅後谷南遺跡出土例を見る。土器溜まりN出土例（5期併行）にB1類、C1類、SD2016（新）出土例（6期併行）にA2類、A3類、B1類、C2類、SK2003出土例（7期併行）にA2類、B1類、C1類が見られる[高野2003]。近江・山城地方は5～8期併行頃にB1類、C1類、C2類、D1類が見られる[國下1995；赤塚編2002；（財）大阪府文化財センター2003]。大和地方や大阪湾地方では本報告分類と対比できるものはないようである[赤塚編2002；（財）大阪府文化財センター2003]。

A1類は5期頃から南関東、佐渡、阿賀北、能登地方で見られ、B1類も5期頃から南関東、佐渡、加賀、北近畿地方で見られる。A1類、B1類は5～6期に加賀、能登地方から各地に広がったと推測する。C類は5～6期に南関東、北近畿、山城地方で見られ、7期頃に阿賀北、信濃川左岸、越中、北近畿、山城地方で見られる。北陸西部に見られるC0類が畿内に変化し、7期頃に各地に広がったのであろうか。D1類は6～7期に東北南部、頸城、越中、加賀、山城地方で見られるが、8期以降は越後地域に限られる可能性がある。8期以降の周辺地域の様相は、北陸南西部以西の資料数がとくに少なく判然としない。それでもB2類、D1類、D2類、D3類は8期前後から越後内で器形を変化させて10期頃まで使われたと考えられる。以上から5～6期頃の有孔鉢A・B・C・D類は「北陸系土器」としてよさそうで、これら有孔鉢とともに他の「北陸系」の器種が各地に移動したことは先学の指摘するところである[川村1994・1999；比田井2004]。

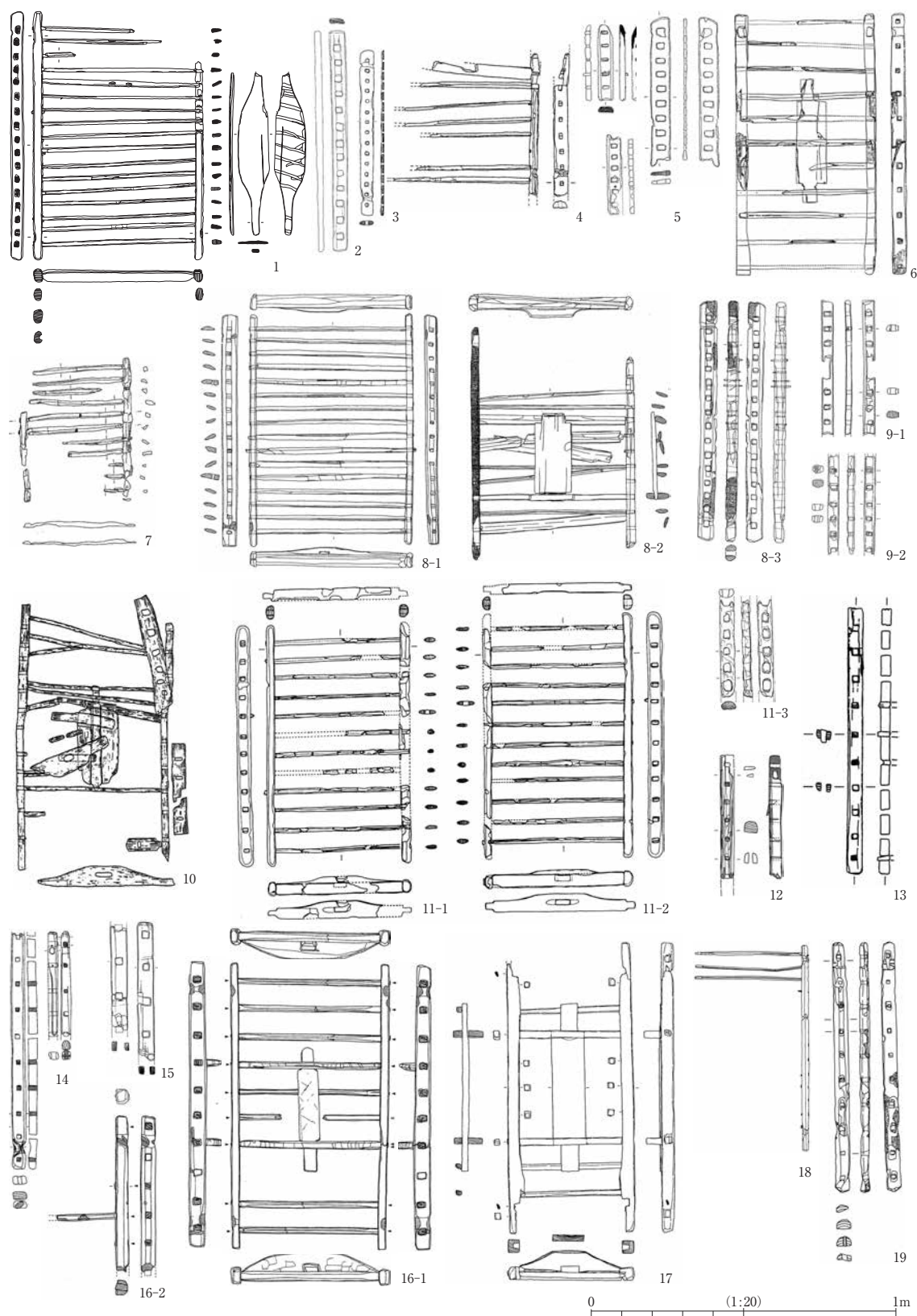
小 結

再び県内出土の有孔鉢についてふれ、小稿の結びとしたい。A1類、B1類は5期頃、A2類は6期頃、D1類は6期前後に加賀や能登地方の影響で作られた器形と考えられる。A3類はA1類が、B2類はA2類が変化して7期以降に続く器形かもしれない。C1類、C2類は7期に近畿地方北部から北陸地方で「流行」した器形ではないだろうか。D類は6～7期に県内に入り、8期以降多様に変化したようである。以上から、用途を同じくすると思われる県内出土の有孔鉢の形態変化は、5～7期では周辺地域の影響が強く反映され、8期以降は県内で独自に、かつ多様に形態変化がなされたといえそうである。

B 木製農具大足について

はじめに

木製農具の大足は、民俗例に見る枠組格子状の田下駄と用途を同じくすると考えられることから、近年では出土資料にも呼称されることが多くなったものである。民俗例では田植え前の代掻きなどに使用されたもので、昭和時代の前半頃まで佐渡地方[山口1972；新潟県教育委員会1979]や南会津地方などの山間部の湿田[佐々木1994]で使用されてきた。今回の調査では、古墳時代前期の所産である大足が足板を伴い出土した。遺存状態は比較的良好で、①横木の数が17本と多いうえに、各横木間の間隔が狭いこと、②足板の枠組への固定方法が後代に一般的となる方法と異なり、3か所の横木に穿たれた2孔一対の円孔に縄などで固定されたこと、③枠組を構成する縦木、横木の木取りが不揃いであることなど、製作技法に特徴がある。以下ではまず県内の出土例を、次に東日本地方の古墳時代から古代の出土例を概観し、本遺跡出土例の位置付けを行う。



第 35 図 東日本出土の大足

番号	所在地	遺跡名	遺構	残存部位 (数値)				法量 (cm)			柵孔				手綱の 繫縛部	足板固定法	樹種	時期	出典
				縦木	横木	足板	長さ	幅	厚さ	数量	形態	法量	間隔						
1	新潟県胎内市	土居下遺跡		2	17	1	81.6	55.6	4.2	17	長方形	2.3 × 1.7	4 ～ 5	有	紐閉じ式	スギ	古墳初頭～前期		
2	新潟県長岡市	奈良崎遺跡		1			73.4		5	13	方形	2 × 2	4.5 ～ 5.5	有		不明	古墳前期	[丸山 2002]	
3	石川県泉沢市	畠田遺跡		1			66.8		5.3	15	方形	1 × 1	4 ～ 4.5	有		スギ	古墳前期	[伊藤ほか 1991]	
4	山形県天童市	高瀬南遺跡	8G252	1	7				4.5		長方形	1.5 × 1	5.5	有	不明	縦木：カツラ 横木：スギ	古墳前期	[長瀬ほか 2005]	
5-1	山形県山形市	藤治屋敷遺跡	SG213	1					4.5		長方形	2 × 1	4.5			スギ	古墳前期後半	[高桑 2004]	
5-2		SG213	1						4.5		長方形	2 × 1.5	3.5 ～ 4			トネリコ属	古墳前期後半	[高桑 2004]	
6	大阪府東大阪市	友井東遺跡		2	11	1	87	47	5	11	方形	1.5 × 1.5	8	有	柵孔嵌込式		古墳前期	[木下 1985] からの転載	
7	群馬県高崎市	柴崎熊野前遺跡		2	11								4 ～ 5		不明		古墳中期	〔(財) 群馬県埋蔵文化財 調査事業団 1998〕	
8-1	静岡県静岡市	曲金北遺跡	VI層水田	2	16		76	53	5	16	方形	1.5 × 1	4 ～ 4.8	有	柵孔嵌込式		古墳中期	[及川ほか 1997]	
8-2			VI層水田	2	10			52.5	4.5			長方形	1.5 × 1	4.5 ～ 5				古墳中期	[及川ほか 1997]
8-3				1				78.5	5	16	方形	1.5 × 1.5	4 ～ 5	有				古墳中期	[及川ほか 1997]
9-1	宮城県仙台市	富沢遺跡第 63 次		1					3.5		長方形	1.5 × 1	4.5 ～ 5.5				古墳時代	[工藤ほか 1999]	
9-2				1					3.5			長方形	1.5 × 1	4.5 ～ 5				古墳時代	[工藤ほか 1999]
10	山形県山形市	嶋遺跡		2	12	1	88	48	4.5	13	長方形		6		柵孔嵌込式		6C ～ 7C	[竹田 2005] 集成からの転載	
11-1	埼玉県行田市	小敷田遺跡	第 256 号土城	2	12		80	47.8	4.6	12	長方形	2 × 1.5	5 ～ 7	有	柵孔嵌込式	スギ	7 C	[吉田ほか 1991]	
11-2			第 256 号土城	2	12		82	52.2	4.4	12	長方形	2 × 1.5	5.5 ～ 7	有		柵孔嵌込式	スギ	7 C	[吉田ほか 1991]
11-3				1					4.5			長方形	3.5 × 2.5	5 ～ 6			スギ	7 C	[吉田ほか 1991]
12	宮城県仙台市	富沢遺跡第 30 次	SD-1						3.6		長方形	1.5 × 1	6 ～ 6.5			カヤ	古代	[太田ほか 1991]	
13	愛知県名古屋	志賀公園遺跡	NR07	1			87		4.5	10	方形	2 × 2	7 ～ 9.5				7C 後半～末、	[樋上ほか 1991]	
14-1	静岡県浜松市	伊場遺跡		1							方形	1.5 × 1.5	7 ～ 9	有		ヒノキ	8C	[鈴木 2002]	
14-2				1				3				方形	1 × 1	7 ～ 8	有		スギ	8C	[鈴木 2002]
15	新潟県長岡市	八幡林遺跡							5	不明	方形	2 × 2	10 ～ 11.5	有			8 ～ 9C	[高橋ほか 1993]	
16-1	静岡県静岡市	池ヶ谷遺跡	SK701	2	9	1	94	50	5	10	長方形	2.5 × 2	8.5 ～ 10	有	柵孔嵌込式		9 ～ 11C	[足立ほか 1995]	
16-2				1	1				4.5			方形	2 × 2	9 ～ 10.5	有	柵孔嵌込式	スギ	9 ～ 11C	[足立ほか 1995]
17	神奈川県小田原市	千代南原遺跡		2	10	1	95	41	4.5	11	方形	2 × 2	8 ～ 9		柵孔嵌込式		奈良・平安	[小池ほか 2000]	
18	静岡県静岡市	岳美遺跡	SR-5	1	3		84	47.47	5	15	長方形	2 × 1	5 ～ 6	有			奈良・平安	[山本 1996]	
19	岐阜県岐阜市	顔戸南遺跡	SD4	1			80.8		4.5	10	方形	1.5 × 1.5	7.5 ～ 8			ヒノキ属	古墳時代？	[小野木ほか 2000]	

第 12 表 周辺遺跡出土足 (縦木) 計測表

県内の出土例

県内ではこれまで2例の出土があるが、いずれも縦木のみ出土である。和島村奈良崎遺跡出土例(2)は縦木のみ残存で、 $2 \times 2\text{cm}$ の方形を呈する柄孔が13個穿たれていて、柄孔間の間隔は4.5～5.5cmを測る。弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器を含む層位からの出土であるが、後述するように新潟県内とその周辺地方における弥生時代の様相が明らかでないため、小稿では古墳時代前期の所産と考える[丸山2002]。長岡市(旧和島村)八幡林遺跡出土例(15)は欠損した縦木のみ残存で、 $2 \times 2\text{cm}$ の方形を呈する柄孔が穿たれ、柄孔間の間隔は10～11.5cmを測る。官衙遺跡として著名で、出土したI地区の須恵器の消長から8～9世紀の所産と考えられる[高橋^{ほか}1993]。

東日本地方出土の大足

大足は弥生時代中期以降に使用される[山田2003]ようであるが、新潟県域とその周辺での弥生中・後期の様相は判然としないため、以下では古墳時代以降、古代までの出土した大足について概観する。第35図にはこれまでに知り得た大足を掲載し、第12表にはそれらを時期毎に並べた。図に見るように、縦木と横木がそろって出土することが少ないことがわかる。そこでそれぞれの形態を比較するため、以下では主に縦木に穿たれた柄孔の数量とその間隔に注目する。

本遺跡出土例を含む古墳時代前期の例は5遺跡6例(1～4、5-1・2)で、柄孔の数(縦木が完存するもの、以下同様)は13、15、17個のものがある。柄孔間の間隔は短いもので3～3.5cm、長いもので4.5～5.5cmのものがある。古墳時代中期の例は2遺跡4例(7、8-1～3)で、柄孔の数は16個のものがあり、柄孔間の間隔は4～5cmに収まる。古墳時代後期の確実な例は明らかでない。7世紀代の例は2遺跡4例(11-1～3、13)で、柄孔の数は10、12個のものがあり、柄孔間の間隔は短いもので5～6cm、長いもので7～9.5cmのものがある。8世紀以降の例は4遺跡6例(14-1・2、15、16-1・2、17)で、柄孔の数は10、11個のものがあり、柄孔間の間隔は短いもので7～8cm、長いもので10～11.5cmのものがある。以上から柄孔の数量は古墳時代前期～中期が13～17個、7世紀以降が10～12個。柄孔間の間隔は古墳時代前期～中期、6～7世紀代、8世紀以降と時期が下るに従い間隔が広くなると推測される。ちなみに縦木の長さは古墳時代が80cm前後、7世紀以降は90cm前後のものが多く見られる。これらのことから、東大阪市友井東遺跡出土例は8世紀以降の所産の可能性がある。

小 結

上述のとおり、本遺跡出土例の足板は17本ある横木の3本に穿たれた2孔一対の円孔に縄などで固定したと考えられる。それが古墳時代中期頃から横木の2本を山形状や台形状に上方へ張り出させ、中央に柄孔を1個穿ち、そこに足板を嵌め込むようになるようであるが[山田前掲]、古墳時代前期から以前の様相は不明のようである。一方、本遺跡出土例が足板の固定法の古相を示しているかどうか、さらなる出土例を待たなくてはならない。また、本遺跡出土例の柄孔は17本と多く、東日本地方に限れば最多例となりそうであるが、弥生時代中・後期の様相も注視しなくてはならない。今後はさらに丹念に類例を探し、小稿での推測をより確かなものにしたい。また、ここでふれることができなかったが、土居下遺跡の大足は各部位の木取りが不揃いな点も注目される。類例との比較を進め、その意味についてもさらに検討したい。